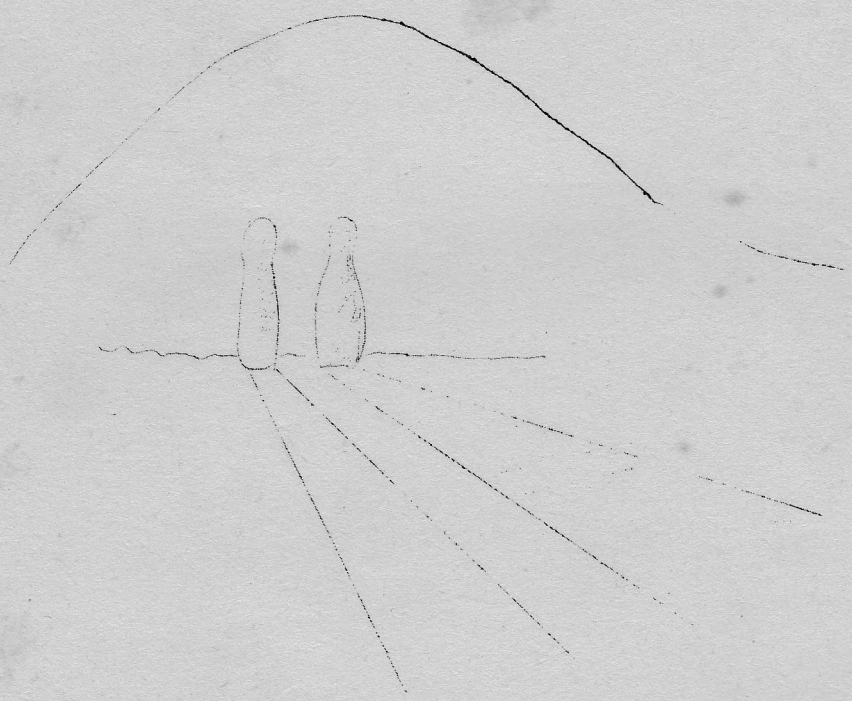
わすたるじむ

創刊号



名古屋大学郷土研究会

目　次

のすたるじす創刊に際して ----- 1ページ
平山先生寄稿文 ---------- 3
桶狭間へ行って ---------- 山岸章 ------- 7
無題 ---------- 鈴木克祝 ---8
種子 ---------- 桶口清司 ---9
桶狭間へ ---------- 一年某君 ----9
桶狭間実地踏査観想文 ----- 鈴木克祝 ---11
古戦場めぐり(1)桶狭間 ---- 桶口清司 ---12
レポート ---------- 一年某君 ----13
居眠りノート ---------- 14
研究発表 ---------- 松山博 ---15
郷研のこと ---------- 桶口清司 ---17
孤独 ---------- 松山博 ---19
学生の文化活動 ------- 高島英明 ---20
のすたるじす ---------- 津坂孝隆 ---22
郷研すきゃんだる(1) ---------- 23

のすたるじす創刊に際して

片山勝治

中学生の時、学校の先生から「夢や希望は大きい程良い。いずれは小さくなって行くものだから」と聞いたことがありますが最・近はトくその言葉が思い出されます。我々「郷土研究会」が今年三月廃校寸前の中学校の宿直室で持った話し合いを通して第一歩を踏み出して以来今日に至るまでを振り返ってみると必ずしも初めの計画通りに進んで来なかったことと思わざるを得ません。入会希望を表示した新入生も最初の頃は十四、五名いましたが現在はっきりしたかたちで残っているのは五本の指で数えられるくらいだというのも活動の充実度を示す一つのバロメーターと思ってよいと思います。そこには私自身が日常の雑事や感情を性格に絡れたり人間としての価値観が変化したりして会長としての責任を果して来なかったことが一つの原因をなしていると思い反省しているこの次第です。しかし共同活動とは良くしたもので二年生諸君もクラブの中核となるべく成長し少数ながら意欲的な一年生諸君が出て来たことは非常に喜ばしいことだと思います。活動面では四月の稲荷間シリーズより続いて名太祭の時の合宿、夏休みの島鶴牛仙遺跡査、そして今次の「名古屋城」をテーマとする毎週の学習会とやって来ました。と兎かくも休まずにやっていかれるが人的にも活動面でも一つの流れがつくられてきたということです。これからその流れが絶えることなく又同一円周上を回っていくのではなくしてどんなにゆるいカーブでも一つのらせん形を描いて上昇して行くとしたら我々はそこに何等かの可能性が見出せるに違いありません。「一体俺はどうしてこんなことをしているのだろうか」「よそのクラブが羽振り良くやっているのに俺達はどうしてこんなに目立たぬことをせねばならないのかな」というようなことは私自身今まで何度も考えて来たし現在でも時々疑問に思うことがありますが、しかし新入生の多数が関心を示して

大都会のある大学祭のテーマにまで取り上げられる「郷土…」には何かあるはずです。目まぐるしく変化する現代に於て絶えず「無」に対する不安に苦しむ人間の心の底には Ein geborgenes 故郷喪失感が潜んでいるとある著名な哲学者がいった。ことがあります。私はこの意味をはっきり理解することが出来ませんが 万事流転 川底し何者も定住しない世界 にあって有限な期間だけ生きる我々が「その世界と少しでもそこに生きる人間をどんなに狭い範囲でも追求して行くのはたのもしいことだと思います。我々はサークルに於てそれらを厳しく追求して行く「流れ」を創造することなかで限りない可能性と収穫を見出そうではありませんか。その意味でどんなに粗少でもここに機関誌がすたらしく創刊号が発行され会員相互の内面的なつながりや向上を図る一つの場が設けられることは有意義なことだと思います。次号以後の充実を期しましょう

— 終り —

誌名由来

先月十人程のミーティングで機関誌の名称を決定すべく討論が行われその時候補として

1. 研鑽
2. 散楽
3. 青年
4. 知己
5. ノスタルジス

の五つが出され全員の後式投票で津坂君の出した「ノスタルジス」と決定されました。その議論は後に出ていますが、その後帰りの者(三)の怠惰や原稿の少なさから第一号発行が非常に遅れ申し訳ない次第です。次号からは皆さん何でもよいですからどしどし寄稿して下さいネ！

多様な会員の積極的参加がカギ！

―平山教養部教授クラブを語る―

まがりなりにも郷土研究会の名を掲げて発足したわがクラブは何と言っても会員自体が未熟なものであるから始めて飛び上ったカモメ みたいなもので何時落っこちるとも限らない。そこで何らかの指針を求めて見識豊かな平山教授に一筆願うことにした。多忙中何度も無理を申し上げてのことであるから我々もバイトに勉強に(?)忙しいのに甘えることなく真摯な態度であらゆるものを吸収しわがサークルの強力な発展に尽力しようではないか。以下は教授の草稿である。

思いつくままに

(その一)自己表現による向上

今度諸君が機関誌を持つことになったそうであるが、大変結構なことと思う。それは諸君のサークル又はクラブのメンバーの共通の広場としてメンバー相互間のより円滑なコミュニケーションの最上の道具として極めて有意義であることはあらためて指摘するまでもないだろうから。ここでは雑誌をもつことの別の効用について触れてみよう。

雑誌を持ったからには、メンバー各自が

ひとりのこゝろ書くことが何よりも大切なことである。雑誌を持つことの意義は書くことを通して始めて表出するものである。

書くことは自己を表現することであるが、この表現ということは自己を確かめ或は自己を追求することに於ける大切である。

表現は自己をひとつの形として現わし、自己をその客観として眺めうる唯一の方法である。従って表現する者は自分が体験的内容として意識的であるが、しかし

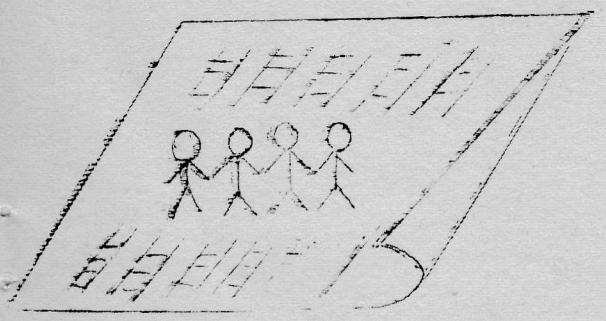
ある場合には混沌として、ある場合には混沌としたまま感ずるだけ又は考えるだけしかない

ここに一つの形を創造せねばならない、つまり明確化せねばならないわけである。

書かゝ書くことによって、表現を通して、

自己の内面をあらわにし自己を眺め自己を確かめ、そのことによって深く自己を追求しそして豊かにすることが出来る。新聞雑誌を持つたからには、諸君は深くこの点に思いをとめて、みなが残らず書くように努めることである。そうすることによって、メンバー相互間のより内的コミュニケーションが可能になるだけでなく自己自身の成長が保証される

という二重の効用がはたされてくるのである。



(その三)"楽しかった自然愛好クラブ"
"会員構成は多様的に"

君達から学生時代のクラブやサークルについての思い出を書いてくれとの注文であったのでそういったものについての思い出を一つ綴ってみよう。今でも楽しい思い出となって残っているそういった種類のものの一つに「自然愛好クラブ」がある。それは学生時代のことではなく、大学を出て何年も経った頃のことである。このクラブへ入ったというより引張り込まれたのは、私の教えていたある大学の教え子の女性である。構成メンバーは各種大学の男女の学生のほかに色とりどりの自由職業人——詩人、画家、音楽家、教師、評論家等々——を加えた総勢三十数人のクラブであった。

企画は主に学生委員がたて、気の向いた時、気候の快適な時に、渓谷や高原にテントを用意し、食料を用意して出かける。一、二泊の日数でテントを張り、自然のふところで、男女年令の区別なしに、歩きかつ語ったものである。このクラブの楽しさは自然のふところに飛び込んでの生活であったということの他に、メンバーが両性にわたっていたということ、年令層が巾広かったこと、学生の他に各種の自由職業人が参加していたこと、

などにあったようである。高原や渓谷のキャンプ地で、豊富な諸題について傾聴したり討論したりしたものである。このクラブの楽しかった思い出かる諸君にすすめたいことはクラブであれ、サークルであれ、会員は出来るだけ多様性をもたせてつのること、出来るならば学生だけでなく(学生だけの

も同じ学校だけに限らないこと)、その他の人々―例えば教官などにも参加してもらうこと、テーマについて討論する場合でも時には渓谷や高原に出かけて共に語りあかすこと、等々である。

……この種の過去の思い出はいろいろつきないが、又の機会にゆずることにし、諸君のクラブの充実と発展、そして本誌の一つがない成長を祈って擱筆することにする。

(筆者は教養部社会学教授御多忙の折執筆願ったもの)

尚見出しさし絵は編者入

桶狭間へ行って、

山岸 章

まず先日は初めて入った僕に親しくして下さり僕に郷土研究会を続けて行こうと決心させて下さった先輩諸氏に感謝を述べたいと思います。

僕は大学に入る前には、文学や厂史に出て来る土地を訪ずれたいとか、又それらのことを研究したいと思ってましたが、この郷土研究会はまさに僕の思っていたサークルです。以前に僕はワンゲルに入ってその夢を期待していましたが、それが破れて今は郷土研究会に安住の地を求め得られた様な気持です。

さて、桶狭間へ行った時の反省をしたいと思いますが僕は桶狭間がどうだとか言うよりまず先に先日の行動について思った事を述べさせてもらいます。まず第一に遠順ですがあの時はなるべく事実に準じてと言うことでしたがそれはそれなりに良く又道を変えるのも良いですが様としてはもっと先に調べ地などあっては通れませんが厳確に行なうべきだと思いました。次に時間ですがあまりに早く終った感じがしました。もうちょっと関連箇所を回れば良かったと思います。このこととつながると思うのは統率力のことです。行く前にどこへ行くと決めておいてぐんぐんひっぱって行けば良いと思います。しかし先ほはあくまでも全員賛成のもとですが。さて桶狭間その物については僕は単に信長の奇襲とかだけでなくその背後の状況等を考えこの合戦を見るべきだと思います。そして単に英桂盛衰と見るのでなく歴史的発展の一部として確実に認めて行くべきだと思います。僕の考えはまだ未熟で先輩のお考えとは違うかもしれませんので良く御指導下さい。

この原稿は昭和40年5月に桶狭間へ実地調査した後の原稿です。山岸氏若冠19オの意気揚揚たる時のもの。

『人間五十年、下転の内をくらぶれば、夢幻の如くなり』

――――『敦盛』より

鈴木克祝

中学校へ入学して以来ずっと語学に対する苦労の絶え間がありません。(貴方はどうかは知りないが、僕の場合は特にそう。)わからない単語を調べるのも、いいかげんいやになるが、文の意味がうまくとれない場合はそれが一層拍車をかける。先生にあてられれば、文句を言われない程度にお茶をにごさねばならぬ。英語はもう七年以上も学んでいるのに、ろくに日常の会話も出来かねるのが現状です。先日もある教会へ行って来たが、そこの外人が話す簡単な事もなかなかとらえにくい。普通の会話のスピードにはとてもついていけないし、又僕には母音の区別が会話中にては余りはっきりつかないからです。又個々の単語についてもその都度日本語になおしてるのが状態です。やはりその単語のままで覚えておかなければならないと思うのですが。落胆の気持と同時に今までの勉強の仕方が残念に思われて仕方がありません。何かかたい話になったからここでやめよう。

ところで僕は家では一番年下です だから生まれてこのかた、いつも頭が上らずどおしだったが長男は男の子が生まれたので、僕の子分にしようと休み中など、かわいがって?いろつもりです。

幼児の成長過程を見た事のない僕だから、いろいろ興味を持ってながめている。幼児達一般について言える事ははたの物のする事を非常に良く覚えいる。自分の物としてゆく吸収力です。全く何もわからない状態、覚える手段さえもわからない状態から、ほんの小さな事ながらそれを覚えてゆくという事は非常に困難な事でありましょう。僕らがある事を覚え、使えるようになるには、それ以前の言葉とか他の多くの要素が積みあげられてるからこそ出来るのですから。全く初期の段階で無の状態から有の状態へ移行する事 何と不思議な事でしょうか。神の存在を理由づける一つに、こんなのがある。言葉の発生を考える、則ち、僕らは親から教えられてまがりなりにも、話す。親はその親から教えられる……ずっと昔にさかのぼって最も初めはどうであるか。そこには超自然的力が働いたりではないかと

「種子」クラブ雑感

樋口清司

郷土研究会、こりいかつい名前の同好会、春まだ遠い去年の二月初旬、名大構内にその種子が舞いおりた。だれにも知られず、春の陽を待ちわびている、どんな花が咲くのか？土中で、名大構内の片隅で春の発芽を持っている。それはどこから運んできたか。「バスハイク」というかってあったサークルの分裂？の風に乗ってきた。又風が吹けばどこかへ運んで行くのだろうか。いや彼はもう着々と活動している。この地で発芽しようと。

「文サ連の開花した春の庭のような華さはここにはない。冷たい木枯しと出芽をはばむ大地がある。だが堅い種皮のその内で黙々と働いている。「何を望んで！」真紅に燃えるカンナの花、春の豪華な桜、いや、そんな芽は見ていられない。この厳しい試練に耐られるだろうか。うまく発芽するだろうか。

胚は言う。「俺は世界中のすべての花を統合したような花を咲せる。そんな発芽を、」又胚乳はいう。「おのれをしっかり見つめ、華さにおぼれぬ花を咲かせたい」と。又……は「……」。

どんな花が咲くのか？誰にもわからめ、しっかりとした発芽を基礎に、たとへばうゐうゐとも立派な実のあるものにしたい。スムーズな成長への基礎を固めたいとみんなは言う。いやしくも山内の花にはなりたくないと。

――この原稿は樋口君一年の時のもの

桶狭間へ

報告　無記名

「昭和41年新入生秋季踏査」

前日の雨で多少心配されたが、朝方には太陽がのぞく様になった。予定では午前9時半までに名鉄電車神宮前駅に集合であったが、僕が着いた8時10分頃には、一人しかいなかった。予定は守られないものであり、名古屋時間は日本標準時より30分遅れているようだ。9時少し過ぎに出発。総員11名。一年生は僕を含めて五名。一年生の数が以外に少なかった。あと2名は来るものと思って

ように、でもこの位の人数でちょうど良いのかも知れない。

まず最初熱田神宮に行く。正月には毎年欠かさず参拝に行くので、熱田神宮についてはかなり知っているつもりだが、宝物館や能楽堂を始めて見て、「おや、こんな所にこんな建物が」と思った。熱田神宮へ来る時は、いつもすごい混雑で、一つ一つ建物を見物している暇はないからだ。でもいつもにくらべて静かな神宮は伸々いいもんだ。鳴は鳴くし、緑も美しい。

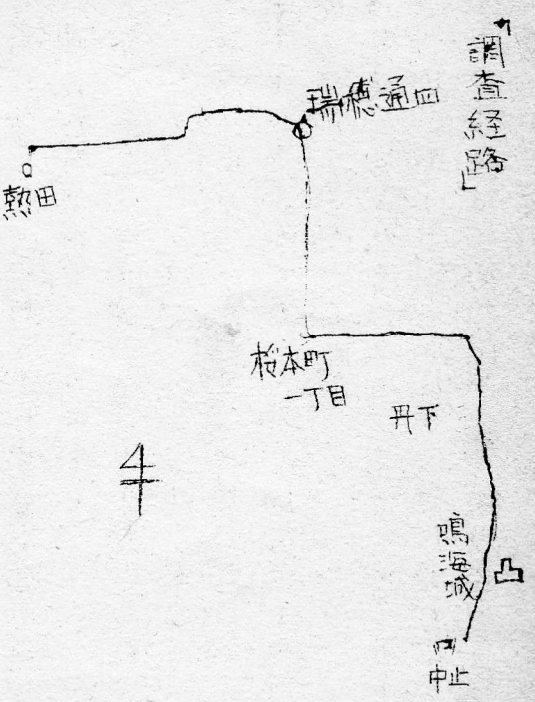
神宮を出てからは真直ぐ東へ向う。半巻を過ぎ瑞穂に近づく頃足にちょっと疲れが来た。待たされてじっと立っている疲れより、この様に足を動かしている時に起こる疲れの方がずっと気持が良い。自転車をよく乗り廻すので、自分の住んでいる場所は勿論、名古屋市の中南部地域の地理はかなり明るく、そこらあたりも以前通った事があるので周囲の景色もさほどめずらしくもない。が桜本町より東はまだ行った事がなかったので、興味のある所だった。知らない土地を歩くことは実に面白い事だ、この道をずっと行けば一体どこへ出るのだろうか、珍らしい建物があるぞ、等と思いながら歩く。そして、ふと自分の記憶していた[illegible]の名前とか建物とか遺跡とかにぶつかると、がそうなのかと思ってうれしくなる。

瑞穂通四丁目で右手に折れ、桜本町一丁目までずっと南に進む。伸々軽快なテンポとスピードで調子がいい。桜本町で左に回わり、後で東へ向かう。朝方晴れていたものの何か頼りない感じの空模様だったが、やはり西の空には黒雲が一面にたかってきた。まさに信長のその日を再現するかの様だが、雨具を持たない者にとっては、困った事である。黒雲のスピードより早く我々が歩けば雨に降られないですむが、そんな訳には行かず、まもなく雨に降られ、一軒の菓子屋兼食堂に避難。寒冷前線の影響とかで、その雨もしばらくしてあがったが、今度は多少寒くなってきた。お好み焼きを三つ注文しただけで、そこを出て右手へと坂道をのぼる。歩いていくともう丹下の砦だった。ここまですぐの様な気がしたが、時間的には熱田を出発してからかなりの時間が立っていた。丹下の砦は見晴しのよい所にある。ちょうど名古屋方面に伸びた台地の先端にあるといった感じだ。だから名古屋方面は、南部地帯から栄町等の中心部まで一望の下に見渡せるが、その反対に東の方

(鳴海方面)は良く見渡せない。建物のせいもあるだろうし、音と今とでは地形的差異があるのであろうが、これが織田方の砦と考えるには疑問が残った。後に調べて見ると、やはり丹下の砦は織田方であった。

また歩く。お昼もすぎ、腹も減ってきた。しだいにあたりがにぎやかになっていく。もう鳴海の町中に入ったのであろうか？三番目の目的地鳴海城跡に着く。今は完全に町中にあり、あたりより多少高い事を除けば、城のあったことを証拠だてるものはない。たゞ昭和18年に立てられたゞここに鳴海城ありきを示す石碑あるのみ。また雨が降りだした。お寺の鐘つき堂に避難。今度はしばらくやみそうにない。ここで昼食。実に寒い。そこで駅近くのたいこ焼屋に場所を移す。やっとほっとした。結局この旅行は鳴海で中止となった。中止と決まり、駅につくと急に疲れがでてきた。ホッとしたのかも知れない。とにかくこんなに長い距離を歩いたのは始めてだった。但し家に帰ってから大変だった。すぐに足一面にサロメチールを塗る。そして横になったが足が痛くて思う様には休めなかった。寝る前、風呂からでて、又サロメチールを塗る。それで翌朝は人並にもどった。

「調査経路」



(昭和41年5月新入生歓迎会での挨拶の感想です)

L1 34 鈴木克祝

今度の実地踏査は都合で下準備が出来なかった為に、興味がうすれた感がしました。人員は適当と思います(やはり余り多人数ではうまくゆかないと思われます。) 調査地にては寺社等を訪れ、文考資料や説明を求めるのも良いと思う。下準備は十分すべきです。時間にとらわれる必要はないと思う。実地踏査当日や、時間的に遅れたが、もう少し細かい計画が必要。

郷土研究会加入については他校との合同での活動がほとんどなされない、という事で入りました。名大独自の活動でやってほしいと思います。多人数バラバラでは本来の目的がそがれ、研究内容も浅い物になると思われるから。

（昭和40年彼が入学時の感想です）

古戦場めぐり(1) 桶狭間

51 3H 樋口清司

新日入会したばかり、なにもわからぬまゝに参加、期待と不安入混り、ちようど信長が清須を出て落着かぬ心持と似かよったものがあるかもしれぬ。そんな快よい空想を胸に清須の城をいや自宅を出た。集合地熱田神宮へは八時三十分きっかりについた。名鉄線不慣れか、それとも早朝六時起床でねぼけていたかが神宮前をはるかに乗越し、大江駅まで乗り越してしまった。はしたない、見なれぬ先輩諸氏と混って神宮参拝後、いよいよ歩行が始った。井戸田前や桜町停留所をすぎ野並へさしかかると道路の両側は麦畑や水田、すっかり気分が出てきた。鳴海城跡や善照寺(金勝寺)を探しその高台から東をのぞめば信長が心境いかなるものだったろうと回想、空想に耽おどった。信長が軍を進めたという間道と平行して走る鎌倉街道をさわやかな五月の風をうけて足軽を進想しながら進軍した。疲労も少々出てきたが空気もうまく、しかも天気もよし、歩く事の素晴しさ大いに味わった。鎌倉街道をはずれ間道へ再突入、畑と丘陵は中世戦国のせのびかな一面を思い出すには十分でもった。その静かな平和、戦乱の息つぎ、嵐の前静けさかとも思われる。相原郷をすぎたあと前述の鎌倉街道をはずれた山道をすすめばなかなスローブがりくつも重なり準平原を思い起す絶好のハイキングコースだ。一つ一つ小さい丘を登りたりして桶狭間へと進軍するけれど目的地は遠い。疲れも感じぬまま心は戦国の世、豪快な長に引っぱられる足軽だ。風かおる五月、緑晴しい、の一語、厂史と現実の接点、名鉄、国道一号線を横切り、高徳院の丘が見えてきた。その丘を一気にかけおりた、信長みごと義元打ちとった。すぐ下に墓があった。いかにも古く風雨にさらされた跡は一目でわかった。しかし義元の墓付近よりも僕たちが歩いてきた国道、名鉄を横切る前の丘陵地帯に囲まれた盆地状の地が戦場としてぴったり

だ、信長のコース、たしかに歩いてみて実感がわいてきた。三百年以上前の昔を身体で感じることが出来たのは全く楽しい。この踏査、まず歩くことのすばらしさを改めて知らされた。ただ入会直後の業は予備調査がしてなかった事が残念でなら

現地にたって、当時の武将が思いめぐらした数々の軍事作戦、そんなものを研究したかった。ある土地の老人いわく「恋という字は知らんけど！！！！。人間は三百年前も今も同じだ！！」いまも耳の奥で熱弁をふるっている。土地の人の話もよく聞いてその地を少しでも理解することも意義深いことだと思う。なにより ピクニック気分ONLYに終らず、アカデミックな面を前面に出すことが重要だと思う。今度の調査で現地においてもう少しの余裕が欲しかったし、そこでみんなで検討し、討論して調査を深めるといいと思うが。とにかく最初の活動として、信長の勝利の喜びに浸ぬくらい楽しく有意義なものだった。

「昭和40年5月26日記」

（樋口君がまだ新鮮で……だった時のもの）

レポート

'66・5・7.

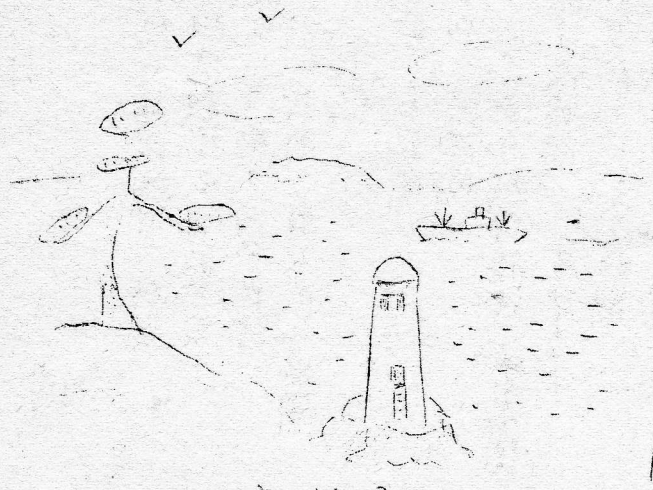
某氏

過日の桶狭間実地踏査は天候にめぐまれず、その計画を十分実行することができず、それ自身意味をなさなかった。「人生は無意味である」という（誰かが）私は以前からそれに肯定的であって、それは人生が非理性的で偶然的であることに由来すると考えた。その意味において人間のたてた計画が自然の前にもろくも崩れ去っていくことは何ら不思議ではない。また人生を構成する一部品である行事が無意味であるのも無理ではない。

私が入部に際して希望したことは、集団の中の個人個人でなく、個人々々の集合としての集団であってほしいということであった。先日の実地踏査を例にとると、桶狭間へ行くのだということのみが、その集団の目的であればよいと思う。中には写真マニヤもいるだろうし、戦略研究者もいるだろうし、石ブームにあやかった採石愛好者もいるだろう。ある一つのテーマを決めて、それを深く掘り下げ探究するというよりはそのテーマを糸口に、個人の特性と興味に従って考えていくのがよいと思う。そうしたいわばバク然とした断片を統

合しつつ、このテーマをより鮮明なものにすることができれば最上である。

伝記作家ルートヴィヒはその著『シミリーコン』の冒頭に次のようにのべている。「こうだから、こうだと型で押していくのでなく、その人物の全体像を造形するのがわたしの原則である」私はこのことが、テーマを研究していく上に応用できると思う。



伊良湖岬の思い出

居眠りノート

「俺はバスに乗るとまず女の足を見る。ジロジロジロとヨッく観察する。栄養のゆたり具合はどうかノもの生え具合は、形は……と。そしてたいていの場合は自分の女房の大根足を最後に思いなかべてため息をつきながらバスを降りるのである」。

（ある自然科学者H教官）

「よしとその時マルクスは決心した。そして七年間の斗争の末彼は四才年上の美女ジェニーを勝ち取ったのである」

（ある社会科学のノートより）

昔々教養部に目のさめるようなカワユミちゃんがいました。その子はきょうめんな性格なので食堂ではいつも「B定食」を注文しました。春秋めぐり彼女は「B定の女」として知られるようになりました。それと共に生協の営業成績もよったとか何だとか。

（重乳根乃意地悪子かく）

研究発表

松山博

信長の行動並所要時間の研究

大高よりの注進到着より出発まで

一、将士を集める為の所要時間

最少限一時間～最大限二時間

二、軍議に要せし時間

三十分～一時間

〃 各方面の戦況聴取、意見聞

三、出発諸準備時間　考定せず

四、清州より熱田に至る時間

〃 心行程　約四里弱　速くとも一時間

五、熱田神宮参拝、人心集攬、必勝の信念獲得

速くとも一時間

六、熱田より鳴海に至る時間

行程　約二里強　約二時間

―――以上小計　7～10時間

七、鳴海附近の警戒配備、兵力集結

敵情偵察、人里議

何れにしても三～四時間

⑧ 大高～清州注進致着時刻研究

鷲津丸根～二砦陥落　合戦記　11日未明

午前三～四時の間

八、二砦陥落の注進が清州に到着する為の所用時間

午前二時出発

大高より清州まで行程　約6里

速馬最大速度　約三時間

九、大高よりの注進致着時刻

速くとも　午前五時

十、信長の清州出発時刻

速くとも　午前六時半～午前八時ごろ

穏当とする

十一、熱田到着

午前十一時頃　出発　正午頃

十二、鳴海到着

午後二時頃

十三、鳴海にて奇襲部署を定め行動を開始し得る

時刻　午後五時～六時

十四、善照寺→山道→相原郷より北→山道→

田楽狭間

約一里半の行程、少くとも一時間半要す

午後六時～八時

∴夜襲

前研究、合戦記に基き　落城り未明を午前三時と判定せり。

由来記　義元午前五時　沓掛本営にあり、

二砦の陥落近きに在りとの情報を得る。

大高～沓掛　約二里　夜間速馬　約二時間消

∴都合よい。

今川勢の行動につきて昼夜襲を判断す。

由来記　義元前日午前五時頃沓掛本営に在、

一、出発までに約一時間要す。

義元出発時刻　午前六時

一、義元田楽狭間着　行程約一里半

（最大速度にあらざるべし）午前七時

一、由来記　義元が此地に来かかる頃即ち午前七時前後　接報を受く

一、今川軍休憩に移る為の所要時間　約三時間

御大将休憩地着　遅くとも午前八時

一、基後の行動

捷報詳知　首実検　行賞　爾後の行動の軍議　朝食　かくこれする間に正午近くになりたるにあらざるか

一、祝宴開始　正午前後

一、田楽狭間にて義元が織田勢の鳴海砦面の情報得たるは午前八時前後←設解による

信長鳴海到着　午後二時頃

一、義元は信長の到着知らず←油断の根元動機

一、大雷雨の時刻　明ならず

由来記　午後一時前後　二度記述あり

一、合戦記「日没頃清州の城に引上げる」日日没

もしこれが正しいのならば信長は午後あるいは遅くとも正午頃鳴海に着きしより襲した後夕刻までに約四時間ないし六時間の間に戦斗部隊集結行軍七里熱田参拝の少くとも十時間以上の仕事を四～六時間に為したることとなりこれは不合理なり

一、結論

午後一時前後の大雷雨、あったとしても此時は奇襲時期にあらず夕刻奇襲時再び大雷雨あり。（三回記述に注意）

夜陰と大雷雨に乗じたりとみるを至当とする。日没とは20日の日没頃とみるを穏当とする。（憲兵司令官　陸軍中将　中島今朝吾　田楽狭間襲撃批判）より。

郷研のこと ―雑感―

樋口清司

昨年発足以来二年目の郷研も一年生を交じえて二ケ月余部員も増加し新段階に移りつつある今、我サークルの現状をはっきり認識し、未来への展望について考えてみた。

発足当時「郷土を知る」という漠然とした目標のもと、各人このサークルの活動意義を暗黙のうちに了解してきた。しかしこのあいまいな暗黙の了解が怠慢と惰性に陥いらない為にも、この時点で改めて、自分は何を求めてこのサークルに属し、サークルをどうして活動すべきか、又郷土を知るということをもっと具体的に各人の心の中にとらえ、部員意志統合のビジョンを打ちたてる必要はなかろうか。又日々の活動に追われ行先きを見失しなわない為にも。

そのビジョンがたとえ現実ばなれしたとてつもないものであろうと我々に強い連帯感とあすの活動のエネルギーや創造力を生みだしてくれるだろう。いや大きい夢程我々青年の特権だ。

自分自身何をやっているのか、一体このサークルはどうなっていくのか、不安だし、全くわからない。明確なこのサークルの存在理(精神的論理的)が欲しい。

ただ皆と歩き廻り放歌高唱するのは実に楽しい。そういう機会を持つのが、それの外がこのサークルの目的なら、それで満足できればそれでいいのだが。

だがこのあいまいで極めて広義な郷土をどうとらえるかは実に困難で部員一人一人の興味や考え方によって一致しないのは当然である。そこからサークル統一のビジョンを描き出す事は容易な事ではない。しかも現在の活動をより発展させる中でやるべき事で活動目標がビジョンがあいまいだといって決して活動を停止してはならぬ、それこそサークル破滅の第一歩だろう。

もしサークルとして一貫性のある活動を期待するならビジョン造りはどうしても違らねばならぬ関門だと考える。どれほど時間がかかろうとも常に考えなければならないと思う。

日々の活動から我サークル独特の発想や創造、歴史社会の法則、いわゆる人文、社会科学の窓のもとに何かを得ようとすれば、当然研究対象が絞られてくるだろう。そうすれば本来の郷土

を総合的に知る事はむつかしくはろうし部員相互の興味の食違いからへ研究対象を絞れば〉既話者も出てくるに違いない。一体我々は事前的な郷土研究家を目指しているだろうか。アマチュアとして一学生サークルとして限界を知る必要があろう。(限界とは学生でなければ出来ない事、学生独特のもの等積極的な意味し、もちろんその限界と怠慢とはっきり区別せねばならぬが。

かといって、研究対象を絞らず広く手を伸ばせばそれは知識の羅列にすぎず、郷土について表面的にただ記憶としてもっている事のみに終る可能性が多い。だが現代の状況を顧みれば我々は郷土を見る事さえ忘れている。書物の中の郷土を歩いて直接肌に感ずる事こそ大きな意義がある。たとえ一回一回が関連性のない活動であってもへいやむしろその中でこそ〉個々の事項に関連性を見い出し得るかもしれぬ、又そうすることによって何かを感じ何かを得られることは確かだ。その何かをはっきり認識しそれを明瞭にしなければならない。と。いや認識しようと絶えず姿勢を正している。そこにサークル活動の目標を置く事も出来るだろう。

もちろん広く眺めた郷土から何らかの研究成果や法則性が取り出せる事は疑がわないし、それが理想的だ。しかしそれは対象を絞って研究するのに比べて技術的にもはるかにむつかしいだろう。それに知識資料の蓄積によってそれを後輩に受け継いで長年かけて研究する事もできる。しかし、後輩たちにとって受け継げられた資料は自分で歩いた知識ではない。それに残念ながら我々は研究方法も知らぬ。すべては出発点に立ったままだ。

この困難な壁を突き破る大きな力が我がサークルに一つある。それはサークル活動の大きな意義とされている人間関係である。

たった八人の同好会がもちこたえてきたのも相互理解やこの集団が作るムードのためだろう。それに少数であるゆえ、まとまりやすく各人それぞれとの交流も容易だった。我々後輩は寛容容々、よく先輩をこきおろし、言いたい事を言って、それを先輩達は寛容と忍耐で受けとめ我々に何かを与えてくれた。丁度血気盛んな兵士をなだめる老兵士の様に。

こんな先輩とのつきあいもサークルの特色であり特典である。サークル活動をこんな所につまり

部員の交流と人間理解の場・友情を得る場だと考ん、それに重きを置くならば、少々の研究技術の研究知識のえしさを無視してもいいでいか。ただ部員一人一人の欲望を満足させれば。そう考えるのは安易な精神と怠慢の母胎の産物にすぎぬであろう。そしてただ一集団としてダベリングと情報交換の場、暇つぶしの場となってしまうだろう。

相互信頼と豊かな人間関係を基礎により建設的により積極的にあすのビジョンを目指してサークルとして一貫性のある活動をすべきだ。その中にこそ自己の建設的な欲望を満足させ、自分自身がサークルと共に成長して行くと確信する。

しかしながら、その具体的な方法となると行き詰ってしまうのが現状でいつもこれについて考え大いに討論を重ねる必要がある。具体的にわからぬがこういう精神こそ忘れてはならぬ事なのだ。

以上が現在の郷研への期待とささやかな問題提起のつもりである。（一九六六・六・一）

彼の問題提起を受けて我々も討論に参加しよう。我サークルの目的とその方法は？その他は？

孤独

松山博

俺は孤独だ。人中にいても、他人とふざけていても、映画をみていても、パチンコをしていてもそっと孤独がしのびこんできた。いやむしろ、孤独を忘れる為に人と交わり、他人とふざけ、映画をみ、パチンコをしたのだ。しかし、柳に風の如くゆらりと孤独に体をかわされてしまう。コンパの後の空しさ、バスハイクから帰った時の空しさの時には、恐らく孤独は俺の心の中で、にやりとほくそえんでいた事だろう。バイト帰りの寒い道を、オーバーの襟を立てて、こつこつと靴音を響かせて帰って来た時も又同様。一体全体、この世の中で孤独をまぎらわす為でない遊びなんて考えられぬ。人はいつも孤独を忘れ、それに目をそむける為に勉強をし、仕事をし、遊び、結局依然として孤独のままでいて、そして寂しい、寂しいと悲壮がっているのではなかろうか。もしそうならば、何故かくも孤独を恐れるのだ。孤独を友とすればいいではないか。そうすれば、寂しい事なんかありはしない。いつも孤独という友達が側にいてくれるのだ。人間の友達が自分を見捨てても、

い友は影の様に寄り添っていてくれる。恋人に捨てられた、といって嘆く必要もない。いや、恋人を捜す必要もなくなるであろう。俺には恋人よりもいとしい友（孤独）がいるから。一人ぼっちでいても寂しくないのは、人間を友としないからである。孤独の代りに書物でもよい。レコードでもよい。この俺にはピストルでもよい。とにかく、人間の友に代るべきものがしっかりと心の中に根を下した時、寂しさは雲霧消散するであろう。しかし、読書が好きでも、レコードが好きでもまだ寂しがっている人間がいるのは何故か。それは依然として孤独、即ち本やレコードを第三者即ち対象としてみているからである。本やレコードを、自身即ち自分の体の一部として感ずる事ができないでいるからである。孤独程寂しいものはない反面、孤独程愛しいものはない理由である。恋人がいても、本来の孤独はいやされぬ。孤独を恋してこそ孤独と一心同体となり得、寂しさを抜け出る事ができる。孤独を愛する人が寂しそうに他人からみえるのは、孤独を愛する事のできぬ人の限りの量りである。現代の学生はあまりに孤独を忘れ、目をそむけようとして戦々兢々としすぎている。孤独を愛する学生がいてよかろう。それ人達から。本当に澄んだ深い考えが湧き出てくるのではないか。

「学生の文化活動」

O.B. 高島英明

私達が大学の学生として如何なる事をなしていくべきかはこの大学四年、いやそれ以前にもゆっくり考えてその道を定めたことはなかった。それは今から考えてずいぶん損をした様に思われる。

私の学生生活の中では「学問や文化に対する義務」と「楽しめるのは学生時代」という気持の争いの中で前者が後者に敗れたのが常であった。恐らくはこの相克は人生のいつの時代にも表われて来ることなのかも知れない。

私達が今現在の自分の生活を見た場合、今までと同じようにその生活をしている当座には娯楽テレビ、映画、パチンコ、麻雀、酒、女等々いわゆる「楽しめる学生生活」の非常な魅力と手軽さにひかれる。

しかし書物を読むとか、芸術やスポーツをするとかいう智的あるいは熟練を必要とする文化

熟練によってよりそれが楽しめるものにはその努力の壁を打破ることの困難さがゆえに手をつけるのをあとまわしにして来た。そしてその良さを本当に知ることのないうちに時間が過ぎ去っていった。それを打破ることの出来たのはそれに対する自分自身の義務感と社会の評価の圧力に耐えられない時だけであっただろう。しかしそれ等の中でわずかに手がけたものゝ中から今になってみて如何に愉快なことが多かったかを感じ始めた。そしてまだ私の知らない為に味うことが出来ない、そして知ることによって愉快になることが出来る数多いものがあるはずであるし又より深く知ることによってもっと色々の楽しみが出来るものがあるだろう。

私が考えていた「楽しさのある学生々活」はいかにその時私が愉快に感じていたとしてもそれは所詮学生の生活の中でも同じように現実の苦るしさあるいは退屈さの為の一時しのぎの行動であり賭け事や遊びにあるようそれは人間尊重を無視したものである。従って人間本来の人間相互の愛に基かない活動が深い満足を与えるはずもあるまいしそれ自体が喜びとなるはずがない。

しかし私も含めた世の中の人の楽しみが消費ブーム・レジャーブームに走り憂うべき退廃的な傾向にあるへと社会の权威は述べている）のはどうしたものであろうか。それは私達の身の回りの社会施設の保障がないからかも知れない。又それは日本の政治の貧困の為であるのかも知れないし社会体制の悪さがゆえの表われかも知れない。しかし社会の傾向がいかなるものであろうとも私達学生はその為に左右されることを許されないだけの社会的地位と義務を与えられている。例えその地位が社会に於て他人より上に出る為に作り上げた地位であろうとも。人生の若い時代を楽しむ為の地位であろうと私達自身の利益の外に真実の追求を通して社会の利益の為に役立たねばならないだろう。

そうしてそういう中から創造的で人間尊重の文化作りに努力すると共にそういうものゝ中から本質的な愉快さを生み出して行かねばならない。

そして色々の事を知ることによってこのような文化が本当に愉快であることをかみしめていきたいと思う。

のすたるじす（Nostalgis）

津坂峯隆

最初この表題を読まれた賢兄は「のすたるじす」が何を意味するか当惑されるに違いない。そしてこれが平仮名である前からホコリだらけの国語辞典を引っぱり出された事だろう。勿論載っていようはずはないが、片仮名で「ノスタルジア」が出ているのに気付かれるだろう、そう、この「ノスタルジア」からの新造語である。因みに、ウェブスターのポケット版には、「Nostalgia : a longing for something far away or long ago」とある。

我々人間は他の生物が刹那的に生きているのとは違い、過去を考える事が出来、未来も考えそして現在も考えて生きている。現在はともかくとして未来において我々は自然、人工、社会のそれぞれの科学をかじった者としての基盤の上に立った生活を夢見ているであろう。それでは、過去においてはどうであろうか。一日の終りに静かに自分の生活を省みる時、良かった事悪かった事が次々と思い出されてくる。そしてこれらの事から未来に対する教訓を知ろうと努力した事だろう。彼らにとっては反省という事が重大な意義を持っていたのである。

所が、現代のこの高度に社会が発展した中においては、人々、特に若者においては、過去に目をむけるという事が非常に冷笑をあびる事項の一つに入れられる様になった。彼らの行動は不安で一見衝動的とさえ思える物である。彼らに反省を与える事が必要なのだ。彼らに過去のすばらしい事項を学ばせる必要があるのだ。

僕達はこの様な中でいつも「ノスタルジア」を持っていなければならないのではないだろうか。「ノスタルジア」、それをいつも思いうかべつつ大きな飛躍に身がまえたい。

郷研 すきゃんだる（その一）

良いクラブ作りには何よりもお互がよく理解しあうのが第一だと思います。そこで今回は卒業を控え方々に御多忙な四学生の素顔をのぞいてみたいと思います。

保坂英雄氏

経済学部経済学科　耳塚島ゼミ所属
瑞陵高校出身

「尾州木材」の若主人。自分の手で今の店を名古屋一の材木問屋にするのが俺の夢だ」と早くから語っており卒業後もまっすぐ自家経営に打ちこまれる予定。彼の愚直的な目なざしと同様に人格も同い。昨日は伊藤整、今日はローレンスと読書に日を短かくするかと思うと又精力的にクラブ活動にそしてマージャンに…。
けだし彼の特技はお天気予報なり。

松山博氏

経済学部経営学科　塩野谷ゼミ所属
向陽高校出身

名鉄百貨店へトップの成績で入社決定し、とかくなおざりになりがちな教養部でも「優」を十九取ったという現代のエリート。よく縁談が持ち込まれると聞く。三年の夏休みには国道一号線を歩いて東京まで旅をしたという見骨の持ち主。自動車の免許は一生取らない決意だそうな。（間イチャッタ）
保坂氏とはツーカーの中で一時彼との間に「権兵衛党」の教祖論争あり。
煙草を吸わないガンマニア。

鈴木弘氏

教育学部教育心理学科　成章高校出身
見るからに母性本能をくすぐりそうな彼の顔が最近見られないのは寂しい。
風の便りでは大学院への進学も決定し学究生活に入られるそうな。

特別さあびすこおなあ

刑法二三十条　公然事実ヲ摘示シ人ノ名誉ヲ毀損シタル者ハ其事実ノ有無ヲ問ハズ三年以下ノ徴役若クハ禁錮又ハ五万円以下ノ罰金ニ処ス。

のすたろじす第一号
発行　昭和41年12月25日
発行者　名大郷土研究会
編集人　庄山勝治
山青章
桶口清司
印刷所　学生会館印刷室

郷研のこと ―雑感―

樋口清司

昨年発足以来二年目の郷研も一年生を交じえて二ケ月余部員も増加し新段階に移りつつある今、我サークルの現状をはっきり認識し、未来への展望について考えてみた。

発足当時「郷土を知る」という漠然とした目標のもと、各人このサークルの活動意義を暗黙のうちに了解してきた。しかしこのあいまいな暗黙の了解が怠慢と惰性に陥いらない為にも、この時点で改めて、自分は何を求めてこのサークルに属し、サークルをどうして活動すべきか、又郷土を知るということをもっと具体的に各人の心の中にとらえ、部員意志統合のビジョンを打ちたてる必要はなかろうか。又日々の活動に追われ行先きを見失しなわない為にも。

そのビジョンがたとえ現実ばなれしたとてつもないものであろうと我々に強い連帯感とあすの活動のエネルギーや創造力を生みだしてくれるだろう。いや大きい夢程我々青年の特権だ。

自分自身何をやっているのか、一体このサークルはどうなっていくのか、不安だし、全くわからない。明確なこのサークルの存在理(精神的論理的)が欲しい。

ただ皆と歩き廻り放歌高唱するのは実に楽しい。そういう機会を持つのが、それの外がこのサークルの目的なら、それで満足できればそれでいいのだが。

だがこのあいまいで極めて広義な郷土をどうとらえるかは実に困難で部員一人一人の興味や考え方によって一致しないのは当然である。そこからサークル統一のビジョンを描き出す事は容易な事ではない。しかも現在の活動をより発展させる中でやるべき事で活動目標がビジョンがあいまいだといって決して活動を停止してはならぬ、それこそサークル破滅の第一歩だろう。

もしサークルとして一貫性のある活動を期待するならビジョン造りはどうしても違らねばならぬ関門だと考える。どれほど時間がかかろうとも常に考えなければならないと思う。

日々の活動から我サークル独特の発想や創造、歴史社会の法則、いわゆる人文、社会科学の窓のもとに何かを得ようとすれば、当然研究対象が絞られてくるだろう。そうすれば本来の郷土

を総合的に知る事はむつかしくはろうし部員相互の興味の食違いからへ研究対象を絞れば〉既話者も出てくるに違いない。一体我々は事前的な郷土研究家を目指しているだろうか。アマチュアとして一学生サークルとして限界を知る必要があろう。(限界とは学生でなければ出来ない事、学生独特のもの等積極的な意味し、もちろんその限界と怠慢とはっきり区別せねばならぬが。

かといって、研究対象を絞らず広く手を伸ばせばそれは知識の羅列にすぎず、郷土について表面的にただ記憶としてもっている事のみに終る可能性が多い。だが現代の状況を顧みれば我々は郷土を見る事さえ忘れている。書物の中の郷土を歩いて直接肌に感ずる事こそ大きな意義がある。たとえ一回一回が関連性のない活動であってもへいやむしろその中でこそ〉個々の事項に関連性を見い出し得るかもしれぬ、又そうすることによって何かを感じ何かを得られることは確かだ。その何かをはっきり認識しそれを明瞭にしなければならない。と。いや認識しようと絶えず姿勢を正している。そこにサークル活動の目標を置く事も出来るだろう。

もちろん広く眺めた郷土から何らかの研究成果や法則性が取り出せる事は疑がわないし、それが理想的だ。しかしそれは対象を絞って研究するのに比べて技術的にもはるかにむつかしいだろう。それに知識資料の蓄積によってそれを後輩に受け継いで長年かけて研究する事もできる。しかし、後輩たちにとって受け継げられた資料は自分で歩いた知識ではない。それに残念ながら我々は研究方法も知らぬ。すべては出発点に立ったままだ。

この困難な壁を突き破る大きな力が我がサークルに一つある。それはサークル活動の大きな意義とされている人間関係である。

たった八人の同好会がもちこたえてきたのも相互理解やこの集団が作るムードのためだろう。それに少数であるゆえ、まとまりやすく各人それぞれとの交流も容易だった。我々後輩は寛容容々、よく先輩をこきおろし、言いたい事を言って、それを先輩達は寛容と忍耐で受けとめ我々に何かを与えてくれた。丁度血気盛んな兵士をなだめる老兵士の様に。

こんな先輩とのつきあいもサークルの特色であり特典である。サークル活動をこんな所につまり

部員の交流と人間理解の場・友情を得る場だと考ん、それに重きを置くならば、少々の研究技術の研究知識のえしさを無視してもいいでいか。ただ部員一人一人の欲望を満足させれば。そう考えるのは安易な精神と怠慢の母胎の産物にすぎぬであろう。そしてただ一集団としてダベリングと情報交換の場、暇つぶしの場となってしまうだろう。

相互信頼と豊かな人間関係を基礎により建設的により積極的にあすのビジョンを目指してサークルとして一貫性のある活動をすべきだ。その中にこそ自己の建設的な欲望を満足させ、自分自身がサークルと共に成長して行くと確信する。

しかしながら、その具体的な方法となると行き詰ってしまうのが現状でいつもこれについて考え大いに討論を重ねる必要がある。具体的にわからぬがこういう精神こそ忘れてはならぬ事なのだ。

以上が現在の郷研への期待とささやかな問題提起のつもりである。（一九六六・六・一）

彼の問題提起を受けて我々も討論に参加しよう。我サークルの目的とその方法は？その他は？

孤独

松山博

俺は孤独だ。人中にいても、他人とふざけていても、映画をみていても、パチンコをしていてもそっと孤独がしのびこんできた。いやむしろ、孤独を忘れる為に人と交わり、他人とふざけ、映画をみ、パチンコをしたのだ。しかし、柳に風の如くゆらりと孤独に体をかわされてしまう。コンパの後の空しさ、バスハイクから帰った時の空しさの時には、恐らく孤独は俺の心の中で、にやりとほくそえんでいた事だろう。バイト帰りの寒い道を、オーバーの襟を立てて、こつこつと靴音を響かせて帰って来た時も又同様。一体全体、この世の中で孤独をまぎらわす為でない遊びなんて考えられぬ。人はいつも孤独を忘れ、それに目をそむける為に勉強をし、仕事をし、遊び、結局依然として孤独のままでいて、そして寂しい、寂しいと悲壮がっているのではなかろうか。もしそうならば、何故かくも孤独を恐れるのだ。孤独を友とすればいいではないか。そうすれば、寂しい事なんかありはしない。いつも孤独という友達が側にいてくれるのだ。人間の友達が自分を見捨てても、

い友は影の様に寄り添っていてくれる。恋人に捨てられた、といって嘆く必要もない。いや、恋人を捜す必要もなくなるであろう。俺には恋人よりもいとしい友（孤独）がいるから。一人ぼっちでいても寂しくないのは、人間を友としないからである。孤独の代りに書物でもよい。レコードでもよい。この俺にはピストルでもよい。とにかく、人間の友に代るべきものがしっかりと心の中に根を下した時、寂しさは雲霧消散するであろう。しかし、読書が好きでも、レコードが好きでもまだ寂しがっている人間がいるのは何故か。それは依然として孤独、即ち本やレコードを第三者即ち対象としてみているからである。本やレコードを、自身即ち自分の体の一部として感ずる事ができないでいるからである。孤独程寂しいものはない反面、孤独程愛しいものはない理由である。恋人がいても、本来の孤独はいやされぬ。孤独を恋してこそ孤独と一心同体となり得、寂しさを抜け出る事ができる。孤独を愛する人が寂しそうに他人からみえるのは、孤独を愛する事のできぬ人の限りの量りである。現代の学生はあまりに孤独を忘れ、目をそむけようとして戦々兢々としすぎている。孤独を愛する学生がいてよかろう。それ人達から。本当に澄んだ深い考えが湧き出てくるのではないか。

「学生の文化活動」

O.B. 高島英明

私達が大学の学生として如何なる事をなしていくべきかはこの大学四年、いやそれ以前にもゆっくり考えてその道を定めたことはなかった。それは今から考えてずいぶん損をした様に思われる。

私の学生生活の中では「学問や文化に対する義務」と「楽しめるのは学生時代」という気持の争いの中で前者が後者に敗れたのが常であった。恐らくはこの相克は人生のいつの時代にも表われて来ることなのかも知れない。

私達が今現在の自分の生活を見た場合、今までと同じようにその生活をしている当座には娯楽テレビ、映画、パチンコ、麻雀、酒、女等々いわゆる「楽しめる学生生活」の非常な魅力と手軽さにひかれる。

しかし書物を読むとか、芸術やスポーツをするとかいう智的あるいは熟練を必要とする文化

郷研のこと ―雑感―

樋口清司

昨年発足以来二年目の郷研も一年生を交じえて二ケ月余部員も増加し新段階に移りつつある今、我サークルの現状をはっきり認識し、未来への展望について考えてみた。

発足当時「郷土を知る」という漠然とした目標のもと、各人このサークルの活動意義を暗黙のうちに了解してきた。しかしこのあいまいな暗黙の了解が怠慢と惰性に陥いらない為にも、この時点で改めて、自分は何を求めてこのサークルに属し、サークルをどうして活動すべきか、又郷土を知るということをもっと具体的に各人の心の中にとらえ、部員意志統合のビジョンを打ちたてる必要はなかろうか。又日々の活動に追われ行先きを見失しなわない為にも。

そのビジョンがたとえ現実ばなれしたとてつもないものであろうと我々に強い連帯感とあすの活動のエネルギーや創造力を生みだしてくれるだろう。いや大きい夢程我々青年の特権だ。

自分自身何をやっているのか、一体このサークルはどうなっていくのか、不安だし、全くわからない。明確なこのサークルの存在理(精神的論理的)が欲しい。

ただ皆と歩き廻り放歌高唱するのは実に楽しい。そういう機会を持つのが、それの外がこのサークルの目的なら、それで満足できればそれでいいのだが。

だがこのあいまいで極めて広義な郷土をどうとらえるかは実に困難で部員一人一人の興味や考え方によって一致しないのは当然である。そこからサークル統一のビジョンを描き出す事は容易な事ではない。しかも現在の活動をより発展させる中でやるべき事で活動目標がビジョンがあいまいだといって決して活動を停止してはならぬ、それこそサークル破滅の第一歩だろう。

もしサークルとして一貫性のある活動を期待するならビジョン造りはどうしても違らねばならぬ関門だと考える。どれほど時間がかかろうとも常に考えなければならないと思う。

日々の活動から我サークル独特の発想や創造、歴史社会の法則、いわゆる人文、社会科学の窓のもとに何かを得ようとすれば、当然研究対象が絞られてくるだろう。そうすれば本来の郷土

を総合的に知る事はむつかしくはろうし部員相互の興味の食違いからへ研究対象を絞れば〉既話者も出てくるに違いない。一体我々は事前的な郷土研究家を目指しているだろうか。アマチュアとして一学生サークルとして限界を知る必要があろう。(限界とは学生でなければ出来ない事、学生独特のもの等積極的な意味し、もちろんその限界と怠慢とはっきり区別せねばならぬが。

かといって、研究対象を絞らず広く手を伸ばせばそれは知識の羅列にすぎず、郷土について表面的にただ記憶としてもっている事のみに終る可能性が多い。だが現代の状況を顧みれば我々は郷土を見る事さえ忘れている。書物の中の郷土を歩いて直接肌に感ずる事こそ大きな意義がある。たとえ一回一回が関連性のない活動であってもへいやむしろその中でこそ〉個々の事項に関連性を見い出し得るかもしれぬ、又そうすることによって何かを感じ何かを得られることは確かだ。その何かをはっきり認識しそれを明瞭にしなければならない。と。いや認識しようと絶えず姿勢を正している。そこにサークル活動の目標を置く事も出来るだろう。

もちろん広く眺めた郷土から何らかの研究成果や法則性が取り出せる事は疑がわないし、それが理想的だ。しかしそれは対象を絞って研究するのに比べて技術的にもはるかにむつかしいだろう。それに知識資料の蓄積によってそれを後輩に受け継いで長年かけて研究する事もできる。しかし、後輩たちにとって受け継げられた資料は自分で歩いた知識ではない。それに残念ながら我々は研究方法も知らぬ。すべては出発点に立ったままだ。

この困難な壁を突き破る大きな力が我がサークルに一つある。それはサークル活動の大きな意義とされている人間関係である。

たった八人の同好会がもちこたえてきたのも相互理解やこの集団が作るムードのためだろう。それに少数であるゆえ、まとまりやすく各人それぞれとの交流も容易だった。我々後輩は寛容容々、よく先輩をこきおろし、言いたい事を言って、それを先輩達は寛容と忍耐で受けとめ我々に何かを与えてくれた。丁度血気盛んな兵士をなだめる老兵士の様に。

こんな先輩とのつきあいもサークルの特色であり特典である。サークル活動をこんな所につまり

部員の交流と人間理解の場・友情を得る場だと考ん、それに重きを置くならば、少々の研究技術の研究知識のえしさを無視してもいいでいか。ただ部員一人一人の欲望を満足させれば。そう考えるのは安易な精神と怠慢の母胎の産物にすぎぬであろう。そしてただ一集団としてダベリングと情報交換の場、暇つぶしの場となってしまうだろう。

相互信頼と豊かな人間関係を基礎により建設的により積極的にあすのビジョンを目指してサークルとして一貫性のある活動をすべきだ。その中にこそ自己の建設的な欲望を満足させ、自分自身がサークルと共に成長して行くと確信する。

しかしながら、その具体的な方法となると行き詰ってしまうのが現状でいつもこれについて考え大いに討論を重ねる必要がある。具体的にわからぬがこういう精神こそ忘れてはならぬ事なのだ。

以上が現在の郷研への期待とささやかな問題提起のつもりである。（一九六六・六・一）

彼の問題提起を受けて我々も討論に参加しよう。我サークルの目的とその方法は？その他は？

孤独

松山博

俺は孤独だ。人中にいても、他人とふざけていても、映画をみていても、パチンコをしていてもそっと孤独がしのびこんできた。いやむしろ、孤独を忘れる為に人と交わり、他人とふざけ、映画をみ、パチンコをしたのだ。しかし、柳に風の如くゆらりと孤独に体をかわされてしまう。コンパの後の空しさ、バスハイクから帰った時の空しさの時には、恐らく孤独は俺の心の中で、にやりとほくそえんでいた事だろう。バイト帰りの寒い道を、オーバーの襟を立てて、こつこつと靴音を響かせて帰って来た時も又同様。一体全体、この世の中で孤独をまぎらわす為でない遊びなんて考えられぬ。人はいつも孤独を忘れ、それに目をそむける為に勉強をし、仕事をし、遊び、結局依然として孤独のままでいて、そして寂しい、寂しいと悲壮がっているのではなかろうか。もしそうならば、何故かくも孤独を恐れるのだ。孤独を友とすればいいではないか。そうすれば、寂しい事なんかありはしない。いつも孤独という友達が側にいてくれるのだ。人間の友達が自分を見捨てても、

郷研のこと ―雑感―

樋口清司

昨年発足以来二年目の郷研も一年生を交じえて二ケ月余部員も増加し新段階に移りつつある今、我サークルの現状をはっきり認識し、未来への展望について考えてみた。

発足当時「郷土を知る」という漠然とした目標のもと、各人このサークルの活動意義を暗黙のうちに了解してきた。しかしこのあいまいな暗黙の了解が怠慢と惰性に陥いらない為にも、この時点で改めて、自分は何を求めてこのサークルに属し、サークルをどうして活動すべきか、又郷土を知るということをもっと具体的に各人の心の中にとらえ、部員意志統合のビジョンを打ちたてる必要はなかろうか。又日々の活動に追われ行先きを見失しなわない為にも。

そのビジョンがたとえ現実ばなれしたとてつもないものであろうと我々に強い連帯感とあすの活動のエネルギーや創造力を生みだしてくれるだろう。いや大きい夢程我々青年の特権だ。

自分自身何をやっているのか、一体このサークルはどうなっていくのか、不安だし、全くわからない。明確なこのサークルの存在理(精神的論理的)が欲しい。

ただ皆と歩き廻り放歌高唱するのは実に楽しい。そういう機会を持つのが、それの外がこのサークルの目的なら、それで満足できればそれでいいのだが。

だがこのあいまいで極めて広義な郷土をどうとらえるかは実に困難で部員一人一人の興味や考え方によって一致しないのは当然である。そこからサークル統一のビジョンを描き出す事は容易な事ではない。しかも現在の活動をより発展させる中でやるべき事で活動目標がビジョンがあいまいだといって決して活動を停止してはならぬ、それこそサークル破滅の第一歩だろう。

もしサークルとして一貫性のある活動を期待するならビジョン造りはどうしても違らねばならぬ関門だと考える。どれほど時間がかかろうとも常に考えなければならないと思う。

日々の活動から我サークル独特の発想や創造、歴史社会の法則、いわゆる人文、社会科学の窓のもとに何かを得ようとすれば、当然研究対象が絞られてくるだろう。そうすれば本来の郷土

を総合的に知る事はむつかしくはろうし部員相互の興味の食違いからへ研究対象を絞れば〉既話者も出てくるに違いない。一体我々は事前的な郷土研究家を目指しているだろうか。アマチュアとして一学生サークルとして限界を知る必要があろう。(限界とは学生でなければ出来ない事、学生独特のもの等積極的な意味し、もちろんその限界と怠慢とはっきり区別せねばならぬが。

かといって、研究対象を絞らず広く手を伸ばせばそれは知識の羅列にすぎず、郷土について表面的にただ記憶としてもっている事のみに終る可能性が多い。だが現代の状況を顧みれば我々は郷土を見る事さえ忘れている。書物の中の郷土を歩いて直接肌に感ずる事こそ大きな意義がある。たとえ一回一回が関連性のない活動であってもへいやむしろその中でこそ〉個々の事項に関連性を見い出し得るかもしれぬ、又そうすることによって何かを感じ何かを得られることは確かだ。その何かをはっきり認識しそれを明瞭にしなければならない。と。いや認識しようと絶えず姿勢を正している。そこにサークル活動の目標を置く事も出来るだろう。

もちろん広く眺めた郷土から何らかの研究成果や法則性が取り出せる事は疑がわないし、それが理想的だ。しかしそれは対象を絞って研究するのに比べて技術的にもはるかにむつかしいだろう。それに知識資料の蓄積によってそれを後輩に受け継いで長年かけて研究する事もできる。しかし、後輩たちにとって受け継げられた資料は自分で歩いた知識ではない。それに残念ながら我々は研究方法も知らぬ。すべては出発点に立ったままだ。

この困難な壁を突き破る大きな力が我がサークルに一つある。それはサークル活動の大きな意義とされている人間関係である。

たった八人の同好会がもちこたえてきたのも相互理解やこの集団が作るムードのためだろう。それに少数であるゆえ、まとまりやすく各人それぞれとの交流も容易だった。我々後輩は寛容容々、よく先輩をこきおろし、言いたい事を言って、それを先輩達は寛容と忍耐で受けとめ我々に何かを与えてくれた。丁度血気盛んな兵士をなだめる老兵士の様に。

こんな先輩とのつきあいもサークルの特色であり特典である。サークル活動をこんな所につまり

部員の交流と人間理解の場・友情を得る場だと考ん、それに重きを置くならば、少々の研究技術の研究知識のえしさを無視してもいいでいか。ただ部員一人一人の欲望を満足させれば。そう考えるのは安易な精神と怠慢の母胎の産物にすぎぬであろう。そしてただ一集団としてダベリングと情報交換の場、暇つぶしの場となってしまうだろう。

相互信頼と豊かな人間関係を基礎により建設的により積極的にあすのビジョンを目指してサークルとして一貫性のある活動をすべきだ。その中にこそ自己の建設的な欲望を満足させ、自分自身がサークルと共に成長して行くと確信する。

しかしながら、その具体的な方法となると行き詰ってしまうのが現状でいつもこれについて考え大いに討論を重ねる必要がある。具体的にわからぬがこういう精神こそ忘れてはならぬ事なのだ。

以上が現在の郷研への期待とささやかな問題提起のつもりである。（一九六六・六・一）

彼の問題提起を受けて我々も討論に参加しよう。我サークルの目的とその方法は？その他は？

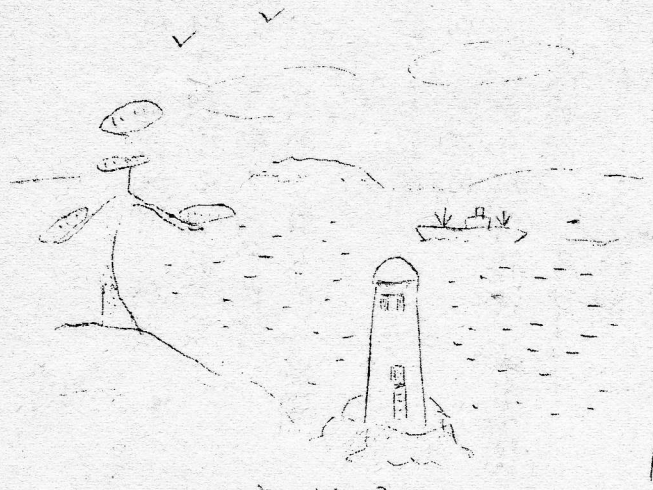
孤独

松山博

俺は孤独だ。人中にいても、他人とふざけていても、映画をみていても、パチンコをしていてもそっと孤独がしのびこんできた。いやむしろ、孤独を忘れる為に人と交わり、他人とふざけ、映画をみ、パチンコをしたのだ。しかし、柳に風の如くゆらりと孤独に体をかわされてしまう。コンパの後の空しさ、バスハイクから帰った時の空しさの時には、恐らく孤独は俺の心の中で、にやりとほくそえんでいた事だろう。バイト帰りの寒い道を、オーバーの襟を立てて、こつこつと靴音を響かせて帰って来た時も又同様。一体全体、この世の中で孤独をまぎらわす為でない遊びなんて考えられぬ。人はいつも孤独を忘れ、それに目をそむける為に勉強をし、仕事をし、遊び、結局依然として孤独のままでいて、そして寂しい、寂しいと悲壮がっているのではなかろうか。もしそうならば、何故かくも孤独を恐れるのだ。孤独を友とすればいいではないか。そうすれば、寂しい事なんかありはしない。いつも孤独という友達が側にいてくれるのだ。人間の友達が自分を見捨てても、

合しつつ、このテーマをより鮮明なものにすることができれば最上である。

伝記作家ルートヴィヒはその著『シミリーコン』の冒頭に次のようにのべている。「こうだから、こうだと型で押していくのでなく、その人物の全体像を造形するのがわたしの原則である」私はこのことが、テーマを研究していく上に応用できると思う。



伊良湖岬の思い出

居眠りノート

「俺はバスに乗るとまず女の足を見る。ジロジロジロとヨッく観察する。栄養のゆたり具合はどうかノもの生え具合は、形は……と。そしてたいていの場合は自分の女房の大根足を最後に思いなかべてため息をつきながらバスを降りるのである」。

（ある自然科学者H教官）

「よしとその時マルクスは決心した。そして七年間の斗争の末彼は四才年上の美女ジェニーを勝ち取ったのである」

（ある社会科学のノートより）

昔々教養部に目のさめるようなカワユミちゃんがいました。その子はきょうめんな性格なので食堂ではいつも「B定食」を注文しました。春秋めぐり彼女は「B定の女」として知られるようになりました。それと共に生協の営業成績もよったとか何だとか。

（重乳根乃意地悪子かく）

研究発表

松山博

信長の行動並所要時間の研究

大高よりの注進到着より出発まで

一、将士を集める為の所要時間

最少限一時間～最大限二時間

二、軍議に要せし時間

三十分～一時間

〃 各方面の戦況聴取、意見聞

三、出発諸準備時間　考定せず

四、清州より熱田に至る時間

〃 心行程　約四里弱　速くとも一時間

五、熱田神宮参拝、人心集攬、必勝の信念獲得

速くとも一時間

六、熱田より鳴海に至る時間

行程　約二里強　約二時間

―――以上小計　7～10時間

七、鳴海附近の警戒配備、兵力集結

敵情偵察、人里議

何れにしても三～四時間

⑧ 大高～清州注進致着時刻研究

鷲津丸根～二砦陥落　合戦記　11日未明

午前三～四時の間

八、二砦陥落の注進が清州に到着する為の所用時間

午前二時出発

大高より清州まで行程　約6里

速馬最大速度　約三時間

九、大高よりの注進致着時刻

速くとも　午前五時

十、信長の清州出発時刻

速くとも　午前六時半～午前八時ごろ

穏当とする

十一、熱田到着

午前十一時頃　出発　正午頃

十二、鳴海到着

午後二時頃

十三、鳴海にて奇襲部署を定め行動を開始し得る

時刻　午後五時～六時

十四、善照寺→山道→相原郷より北→山道→

田楽狭間

約一里半の行程、少くとも一時間半要す

午後六時～八時

∴夜襲

前研究、合戦記に基き　落城り未明を午前三時と判定せり。

由来記　義元午前五時　沓掛本営にあり、

二砦の陥落近きに在りとの情報を得る。

大高～沓掛　約二里　夜間速馬　約二時間消

∴都合よい。

今川勢の行動につきて昼夜襲を判断す。

由来記　義元前日午前五時頃沓掛本営に在、

一、出発までに約一時間要す。

義元出発時刻　午前六時

一、義元田楽狭間着　行程約一里半

（最大速度にあらざるべし）午前七時

一、由来記　義元が此地に来かかる頃即ち午前七時前後　接報を受く

一、今川軍休憩に移る為の所要時間　約三時間

御大将休憩地着　遅くとも午前八時

一、基後の行動

捷報詳知　首実検　行賞　爾後の行動の軍議　朝食　かくこれする間に正午近くになりたるにあらざるか

一、祝宴開始　正午前後

一、田楽狭間にて義元が織田勢の鳴海砦面の情報得たるは午前八時前後←設解による

信長鳴海到着　午後二時頃

一、義元は信長の到着知らず←油断の根元動機

一、大雷雨の時刻　明ならず

由来記　午後一時前後　二度記述あり

一、合戦記「日没頃清州の城に引上げる」日日没

もしこれが正しいのならば信長は午後あるいは遅くとも正午頃鳴海に着きしより襲した後夕刻までに約四時間ないし六時間の間に戦斗部隊集結行軍七里熱田参拝の少くとも十時間以上の仕事を四～六時間に為したることとなりこれは不合理なり

一、結論

午後一時前後の大雷雨、あったとしても此時は奇襲時期にあらず夕刻奇襲時再び大雷雨あり。（三回記述に注意）

夜陰と大雷雨に乗じたりとみるを至当とする。日没とは20日の日没頃とみるを穏当とする。（憲兵司令官　陸軍中将　中島今朝吾　田楽狭間襲撃批判）より。

郷研のこと ―雑感―

樋口清司

昨年発足以来二年目の郷研も一年生を交じえて二ケ月余部員も増加し新段階に移りつつある今、我サークルの現状をはっきり認識し、未来への展望について考えてみた。

発足当時「郷土を知る」という漠然とした目標のもと、各人このサークルの活動意義を暗黙のうちに了解してきた。しかしこのあいまいな暗黙の了解が怠慢と惰性に陥いらない為にも、この時点で改めて、自分は何を求めてこのサークルに属し、サークルをどうして活動すべきか、又郷土を知るということをもっと具体的に各人の心の中にとらえ、部員意志統合のビジョンを打ちたてる必要はなかろうか。又日々の活動に追われ行先きを見失しなわない為にも。

そのビジョンがたとえ現実ばなれしたとてつもないものであろうと我々に強い連帯感とあすの活動のエネルギーや創造力を生みだしてくれるだろう。いや大きい夢程我々青年の特権だ。

自分自身何をやっているのか、一体このサークルはどうなっていくのか、不安だし、全くわからない。明確なこのサークルの存在理(精神的論理的)が欲しい。

ただ皆と歩き廻り放歌高唱するのは実に楽しい。そういう機会を持つのが、それの外がこのサークルの目的なら、それで満足できればそれでいいのだが。

だがこのあいまいで極めて広義な郷土をどうとらえるかは実に困難で部員一人一人の興味や考え方によって一致しないのは当然である。そこからサークル統一のビジョンを描き出す事は容易な事ではない。しかも現在の活動をより発展させる中でやるべき事で活動目標がビジョンがあいまいだといって決して活動を停止してはならぬ、それこそサークル破滅の第一歩だろう。

もしサークルとして一貫性のある活動を期待するならビジョン造りはどうしても違らねばならぬ関門だと考える。どれほど時間がかかろうとも常に考えなければならないと思う。

日々の活動から我サークル独特の発想や創造、歴史社会の法則、いわゆる人文、社会科学の窓のもとに何かを得ようとすれば、当然研究対象が絞られてくるだろう。そうすれば本来の郷土

を総合的に知る事はむつかしくはろうし部員相互の興味の食違いからへ研究対象を絞れば〉既話者も出てくるに違いない。一体我々は事前的な郷土研究家を目指しているだろうか。アマチュアとして一学生サークルとして限界を知る必要があろう。(限界とは学生でなければ出来ない事、学生独特のもの等積極的な意味し、もちろんその限界と怠慢とはっきり区別せねばならぬが。

かといって、研究対象を絞らず広く手を伸ばせばそれは知識の羅列にすぎず、郷土について表面的にただ記憶としてもっている事のみに終る可能性が多い。だが現代の状況を顧みれば我々は郷土を見る事さえ忘れている。書物の中の郷土を歩いて直接肌に感ずる事こそ大きな意義がある。たとえ一回一回が関連性のない活動であってもへいやむしろその中でこそ〉個々の事項に関連性を見い出し得るかもしれぬ、又そうすることによって何かを感じ何かを得られることは確かだ。その何かをはっきり認識しそれを明瞭にしなければならない。と。いや認識しようと絶えず姿勢を正している。そこにサークル活動の目標を置く事も出来るだろう。

もちろん広く眺めた郷土から何らかの研究成果や法則性が取り出せる事は疑がわないし、それが理想的だ。しかしそれは対象を絞って研究するのに比べて技術的にもはるかにむつかしいだろう。それに知識資料の蓄積によってそれを後輩に受け継いで長年かけて研究する事もできる。しかし、後輩たちにとって受け継げられた資料は自分で歩いた知識ではない。それに残念ながら我々は研究方法も知らぬ。すべては出発点に立ったままだ。

この困難な壁を突き破る大きな力が我がサークルに一つある。それはサークル活動の大きな意義とされている人間関係である。

たった八人の同好会がもちこたえてきたのも相互理解やこの集団が作るムードのためだろう。それに少数であるゆえ、まとまりやすく各人それぞれとの交流も容易だった。我々後輩は寛容容々、よく先輩をこきおろし、言いたい事を言って、それを先輩達は寛容と忍耐で受けとめ我々に何かを与えてくれた。丁度血気盛んな兵士をなだめる老兵士の様に。

こんな先輩とのつきあいもサークルの特色であり特典である。サークル活動をこんな所につまり

部員の交流と人間理解の場・友情を得る場だと考ん、それに重きを置くならば、少々の研究技術の研究知識のえしさを無視してもいいでいか。ただ部員一人一人の欲望を満足させれば。そう考えるのは安易な精神と怠慢の母胎の産物にすぎぬであろう。そしてただ一集団としてダベリングと情報交換の場、暇つぶしの場となってしまうだろう。

相互信頼と豊かな人間関係を基礎により建設的により積極的にあすのビジョンを目指してサークルとして一貫性のある活動をすべきだ。その中にこそ自己の建設的な欲望を満足させ、自分自身がサークルと共に成長して行くと確信する。

しかしながら、その具体的な方法となると行き詰ってしまうのが現状でいつもこれについて考え大いに討論を重ねる必要がある。具体的にわからぬがこういう精神こそ忘れてはならぬ事なのだ。

以上が現在の郷研への期待とささやかな問題提起のつもりである。（一九六六・六・一）

彼の問題提起を受けて我々も討論に参加しよう。我サークルの目的とその方法は？その他は？

孤独

松山博

俺は孤独だ。人中にいても、他人とふざけていても、映画をみていても、パチンコをしていてもそっと孤独がしのびこんできた。いやむしろ、孤独を忘れる為に人と交わり、他人とふざけ、映画をみ、パチンコをしたのだ。しかし、柳に風の如くゆらりと孤独に体をかわされてしまう。コンパの後の空しさ、バスハイクから帰った時の空しさの時には、恐らく孤独は俺の心の中で、にやりとほくそえんでいた事だろう。バイト帰りの寒い道を、オーバーの襟を立てて、こつこつと靴音を響かせて帰って来た時も又同様。一体全体、この世の中で孤独をまぎらわす為でない遊びなんて考えられぬ。人はいつも孤独を忘れ、それに目をそむける為に勉強をし、仕事をし、遊び、結局依然として孤独のままでいて、そして寂しい、寂しいと悲壮がっているのではなかろうか。もしそうならば、何故かくも孤独を恐れるのだ。孤独を友とすればいいではないか。そうすれば、寂しい事なんかありはしない。いつも孤独という友達が側にいてくれるのだ。人間の友達が自分を見捨てても、

などにあったようである。高原や渓谷のキャンプ地で、豊富な諸題について傾聴したり討論したりしたものである。このクラブの楽しかった思い出かる諸君にすすめたいことはクラブであれ、サークルであれ、会員は出来るだけ多様性をもたせてつのること、出来るならば学生だけでなく(学生だけの

も同じ学校だけに限らないこと)、その他の人々―例えば教官などにも参加してもらうこと、テーマについて討論する場合でも時には渓谷や高原に出かけて共に語りあかすこと、等々である。

……この種の過去の思い出はいろいろつきないが、又の機会にゆずることにし、諸君のクラブの充実と発展、そして本誌の一つがない成長を祈って擱筆することにする。

(筆者は教養部社会学教授御多忙の折執筆願ったもの)

尚見出しさし絵は編者入

桶狭間へ行って、

山岸 章

まず先日は初めて入った僕に親しくして下さり僕に郷土研究会を続けて行こうと決心させて下さった先輩諸氏に感謝を述べたいと思います。

僕は大学に入る前には、文学や厂史に出て来る土地を訪ずれたいとか、又それらのことを研究したいと思ってましたが、この郷土研究会はまさに僕の思っていたサークルです。以前に僕はワンゲルに入ってその夢を期待していましたが、それが破れて今は郷土研究会に安住の地を求め得られた様な気持です。

さて、桶狭間へ行った時の反省をしたいと思いますが僕は桶狭間がどうだとか言うよりまず先に先日の行動について思った事を述べさせてもらいます。まず第一に遠順ですがあの時はなるべく事実に準じてと言うことでしたがそれはそれなりに良く又道を変えるのも良いですが様としてはもっと先に調べ地などあっては通れませんが厳確に行なうべきだと思いました。次に時間ですがあまりに早く終った感じがしました。もうちょっと関連箇所を回れば良かったと思います。このこととつながると思うのは統率力のことです。行く前にどこへ行くと決めておいてぐんぐんひっぱって行けば良いと思います。しかし先ほはあくまでも全員賛成のもとですが。さて桶狭間その物については僕は単に信長の奇襲とかだけでなくその背後の状況等を考えこの合戦を見るべきだと思います。そして単に英桂盛衰と見るのでなく歴史的発展の一部として確実に認めて行くべきだと思います。僕の考えはまだ未熟で先輩のお考えとは違うかもしれませんので良く御指導下さい。

この原稿は昭和40年5月に桶狭間へ実地調査した後の原稿です。山岸氏若冠19オの意気揚揚たる時のもの。

『人間五十年、下転の内をくらぶれば、夢幻の如くなり』

――――『敦盛』より

鈴木克祝

中学校へ入学して以来ずっと語学に対する苦労の絶え間がありません。(貴方はどうかは知りないが、僕の場合は特にそう。)わからない単語を調べるのも、いいかげんいやになるが、文の意味がうまくとれない場合はそれが一層拍車をかける。先生にあてられれば、文句を言われない程度にお茶をにごさねばならぬ。英語はもう七年以上も学んでいるのに、ろくに日常の会話も出来かねるのが現状です。先日もある教会へ行って来たが、そこの外人が話す簡単な事もなかなかとらえにくい。普通の会話のスピードにはとてもついていけないし、又僕には母音の区別が会話中にては余りはっきりつかないからです。又個々の単語についてもその都度日本語になおしてるのが状態です。やはりその単語のままで覚えておかなければならないと思うのですが。落胆の気持と同時に今までの勉強の仕方が残念に思われて仕方がありません。何かかたい話になったからここでやめよう。

ところで僕は家では一番年下です だから生まれてこのかた、いつも頭が上らずどおしだったが長男は男の子が生まれたので、僕の子分にしようと休み中など、かわいがって?いろつもりです。

幼児の成長過程を見た事のない僕だから、いろいろ興味を持ってながめている。幼児達一般について言える事ははたの物のする事を非常に良く覚えいる。自分の物としてゆく吸収力です。全く何もわからない状態、覚える手段さえもわからない状態から、ほんの小さな事ながらそれを覚えてゆくという事は非常に困難な事でありましょう。僕らがある事を覚え、使えるようになるには、それ以前の言葉とか他の多くの要素が積みあげられてるからこそ出来るのですから。全く初期の段階で無の状態から有の状態へ移行する事 何と不思議な事でしょうか。神の存在を理由づける一つに、こんなのがある。言葉の発生を考える、則ち、僕らは親から教えられてまがりなりにも、話す。親はその親から教えられる……ずっと昔にさかのぼって最も初めはどうであるか。そこには超自然的力が働いたりではないかと

「種子」クラブ雑感

樋口清司

郷土研究会、こりいかつい名前の同好会、春まだ遠い去年の二月初旬、名大構内にその種子が舞いおりた。だれにも知られず、春の陽を待ちわびている、どんな花が咲くのか？土中で、名大構内の片隅で春の発芽を持っている。それはどこから運んできたか。「バスハイク」というかってあったサークルの分裂？の風に乗ってきた。又風が吹けばどこかへ運んで行くのだろうか。いや彼はもう着々と活動している。この地で発芽しようと。

「文サ連の開花した春の庭のような華さはここにはない。冷たい木枯しと出芽をはばむ大地がある。だが堅い種皮のその内で黙々と働いている。「何を望んで！」真紅に燃えるカンナの花、春の豪華な桜、いや、そんな芽は見ていられない。この厳しい試練に耐られるだろうか。うまく発芽するだろうか。

胚は言う。「俺は世界中のすべての花を統合したような花を咲せる。そんな発芽を、」又胚乳はいう。「おのれをしっかり見つめ、華さにおぼれぬ花を咲かせたい」と。又……は「……」。

どんな花が咲くのか？誰にもわからめ、しっかりとした発芽を基礎に、たとへばうゐうゐとも立派な実のあるものにしたい。スムーズな成長への基礎を固めたいとみんなは言う。いやしくも山内の花にはなりたくないと。

――この原稿は樋口君一年の時のもの

桶狭間へ

報告　無記名

「昭和41年新入生秋季踏査」

前日の雨で多少心配されたが、朝方には太陽がのぞく様になった。予定では午前9時半までに名鉄電車神宮前駅に集合であったが、僕が着いた8時10分頃には、一人しかいなかった。予定は守られないものであり、名古屋時間は日本標準時より30分遅れているようだ。9時少し過ぎに出発。総員11名。一年生は僕を含めて五名。一年生の数が以外に少なかった。あと2名は来るものと思って

ように、でもこの位の人数でちょうど良いのかも知れない。

まず最初熱田神宮に行く。正月には毎年欠かさず参拝に行くので、熱田神宮についてはかなり知っているつもりだが、宝物館や能楽堂を始めて見て、「おや、こんな所にこんな建物が」と思った。熱田神宮へ来る時は、いつもすごい混雑で、一つ一つ建物を見物している暇はないからだ。でもいつもにくらべて静かな神宮は伸々いいもんだ。鳴は鳴くし、緑も美しい。

神宮を出てからは真直ぐ東へ向う。半巻を過ぎ瑞穂に近づく頃足にちょっと疲れが来た。待たされてじっと立っている疲れより、この様に足を動かしている時に起こる疲れの方がずっと気持が良い。自転車をよく乗り廻すので、自分の住んでいる場所は勿論、名古屋市の中南部地域の地理はかなり明るく、そこらあたりも以前通った事があるので周囲の景色もさほどめずらしくもない。が桜本町より東はまだ行った事がなかったので、興味のある所だった。知らない土地を歩くことは実に面白い事だ、この道をずっと行けば一体どこへ出るのだろうか、珍らしい建物があるぞ、等と思いながら歩く。そして、ふと自分の記憶していた[illegible]の名前とか建物とか遺跡とかにぶつかると、がそうなのかと思ってうれしくなる。

瑞穂通四丁目で右手に折れ、桜本町一丁目までずっと南に進む。伸々軽快なテンポとスピードで調子がいい。桜本町で左に回わり、後で東へ向かう。朝方晴れていたものの何か頼りない感じの空模様だったが、やはり西の空には黒雲が一面にたかってきた。まさに信長のその日を再現するかの様だが、雨具を持たない者にとっては、困った事である。黒雲のスピードより早く我々が歩けば雨に降られないですむが、そんな訳には行かず、まもなく雨に降られ、一軒の菓子屋兼食堂に避難。寒冷前線の影響とかで、その雨もしばらくしてあがったが、今度は多少寒くなってきた。お好み焼きを三つ注文しただけで、そこを出て右手へと坂道をのぼる。歩いていくともう丹下の砦だった。ここまですぐの様な気がしたが、時間的には熱田を出発してからかなりの時間が立っていた。丹下の砦は見晴しのよい所にある。ちょうど名古屋方面に伸びた台地の先端にあるといった感じだ。だから名古屋方面は、南部地帯から栄町等の中心部まで一望の下に見渡せるが、その反対に東の方

のすたるじす創刊に際して

片山勝治

中学生の時、学校の先生から「夢や希望は大きい程良い。いずれは小さくなって行くものだから」と聞いたことがありますが最・近はトくその言葉が思い出されます。我々「郷土研究会」が今年三月廃校寸前の中学校の宿直室で持った話し合いを通して第一歩を踏み出して以来今日に至るまでを振り返ってみると必ずしも初めの計画通りに進んで来なかったことと思わざるを得ません。入会希望を表示した新入生も最初の頃は十四、五名いましたが現在はっきりしたかたちで残っているのは五本の指で数えられるくらいだというのも活動の充実度を示す一つのバロメーターと思ってよいと思います。そこには私自身が日常の雑事や感情を性格に絡れたり人間としての価値観が変化したりして会長としての責任を果して来なかったことが一つの原因をなしていると思い反省しているこの次第です。しかし共同活動とは良くしたもので二年生諸君もクラブの中核となるべく成長し少数ながら意欲的な一年生諸君が出て来たことは非常に喜ばしいことだと思います。活動面では四月の稲荷間シリーズより続いて名太祭の時の合宿、夏休みの島鶴牛仙遺跡査、そして今次の「名古屋城」をテーマとする毎週の学習会とやって来ました。と兎かくも休まずにやっていかれるが人的にも活動面でも一つの流れがつくられてきたということです。これからその流れが絶えることなく又同一円周上を回っていくのではなくしてどんなにゆるいカーブでも一つのらせん形を描いて上昇して行くとしたら我々はそこに何等かの可能性が見出せるに違いありません。「一体俺はどうしてこんなことをしているのだろうか」「よそのクラブが羽振り良くやっているのに俺達はどうしてこんなに目立たぬことをせねばならないのかな」というようなことは私自身今まで何度も考えて来たし現在でも時々疑問に思うことがありますが、しかし新入生の多数が関心を示して

大都会のある大学祭のテーマにまで取り上げられる「郷土…」には何かあるはずです。目まぐるしく変化する現代に於て絶えず「無」に対する不安に苦しむ人間の心の底には Ein geborgenes 故郷喪失感が潜んでいるとある著名な哲学者がいった。ことがあります。私はこの意味をはっきり理解することが出来ませんが 万事流転 川底し何者も定住しない世界 にあって有限な期間だけ生きる我々が「その世界と少しでもそこに生きる人間をどんなに狭い範囲でも追求して行くのはたのもしいことだと思います。我々はサークルに於てそれらを厳しく追求して行く「流れ」を創造することなかで限りない可能性と収穫を見出そうではありませんか。その意味でどんなに粗少でもここに機関誌がすたらしく創刊号が発行され会員相互の内面的なつながりや向上を図る一つの場が設けられることは有意義なことだと思います。次号以後の充実を期しましょう

— 終り —

誌名由来

先月十人程のミーティングで機関誌の名称を決定すべく討論が行われその時候補として

1. 研鑽
2. 散楽
3. 青年
4. 知己
5. ノスタルジス

の五つが出され全員の後式投票で津坂君の出した「ノスタルジス」と決定されました。その議論は後に出ていますが、その後帰りの者(三)の怠惰や原稿の少なさから第一号発行が非常に遅れ申し訳ない次第です。次号からは皆さん何でもよいですからどしどし寄稿して下さいネ！

多様な会員の積極的参加がカギ！

―平山教養部教授クラブを語る―

まがりなりにも郷土研究会の名を掲げて発足したわがクラブは何と言っても会員自体が未熟なものであるから始めて飛び上ったカモメ みたいなもので何時落っこちるとも限らない。そこで何らかの指針を求めて見識豊かな平山教授に一筆願うことにした。多忙中何度も無理を申し上げてのことであるから我々もバイトに勉強に(?)忙しいのに甘えることなく真摯な態度であらゆるものを吸収しわがサークルの強力な発展に尽力しようではないか。以下は教授の草稿である。

思いつくままに

(その一)自己表現による向上

今度諸君が機関誌を持つことになったそうであるが、大変結構なことと思う。それは諸君のサークル又はクラブのメンバーの共通の広場としてメンバー相互間のより円滑なコミュニケーションの最上の道具として極めて有意義であることはあらためて指摘するまでもないだろうから。ここでは雑誌をもつことの別の効用について触れてみよう。

雑誌を持ったからには、メンバー各自が

ひとりのこゝろ書くことが何よりも大切なことである。雑誌を持つことの意義は書くことを通して始めて表出するものである。

書くことは自己を表現することであるが、この表現ということは自己を確かめ或は自己を追求することに於ける大切である。

表現は自己をひとつの形として現わし、自己をその客観として眺めうる唯一の方法である。従って表現する者は自分が体験的内容として意識的であるが、しかし

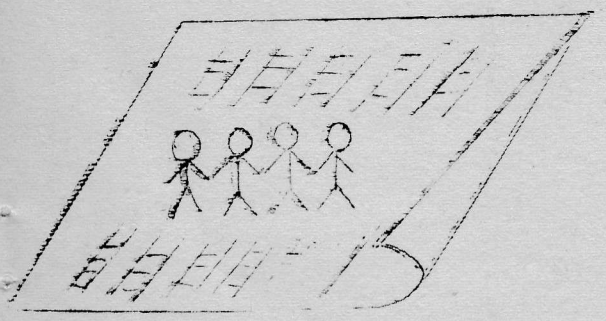
ある場合には混沌として、ある場合には混沌としたまま感ずるだけ又は考えるだけしかない

ここに一つの形を創造せねばならない、つまり明確化せねばならないわけである。

書かゝ書くことによって、表現を通して、

自己の内面をあらわにし自己を眺め自己を確かめ、そのことによって深く自己を追求しそして豊かにすることが出来る。新聞雑誌を持つたからには、諸君は深くこの点に思いをとめて、みなが残らず書くように努めることである。そうすることによって、メンバー相互間のより内的コミュニケーションが可能になるだけでなく自己自身の成長が保証される

という二重の効用がはたされてくるのである。



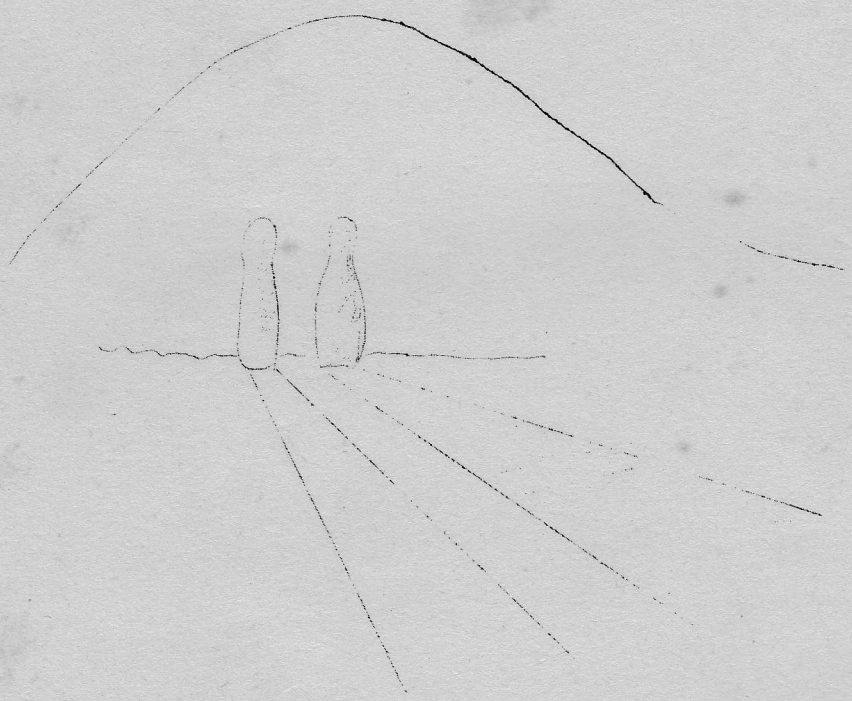
(その三)"楽しかった自然愛好クラブ"
"会員構成は多様的に"

君達から学生時代のクラブやサークルについての思い出を書いてくれとの注文であったのでそういったものについての思い出を一つ綴ってみよう。今でも楽しい思い出となって残っているそういった種類のものの一つに「自然愛好クラブ」がある。それは学生時代のことではなく、大学を出て何年も経った頃のことである。このクラブへ入ったというより引張り込まれたのは、私の教えていたある大学の教え子の女性である。構成メンバーは各種大学の男女の学生のほかに色とりどりの自由職業人——詩人、画家、音楽家、教師、評論家等々——を加えた総勢三十数人のクラブであった。

企画は主に学生委員がたて、気の向いた時、気候の快適な時に、渓谷や高原にテントを用意し、食料を用意して出かける。一、二泊の日数でテントを張り、自然のふところで、男女年令の区別なしに、歩きかつ語ったものである。このクラブの楽しさは自然のふところに飛び込んでの生活であったということの他に、メンバーが両性にわたっていたということ、年令層が巾広かったこと、学生の他に各種の自由職業人が参加していたこと、

わすたるじむ

創刊号



名古屋大学郷土研究会

目　次

のすたるじす創刊に際して ----- 1ページ
平山先生寄稿文 ---------- 3
桶狭間へ行って ---------- 山岸章 ------- 7
無題 ---------- 鈴木克祝 ---8
種子 ---------- 桶口清司 ---9
桶狭間へ ---------- 一年某君 ----9
桶狭間実地踏査観想文 ----- 鈴木克祝 ---11
古戦場めぐり(1)桶狭間 ---- 桶口清司 ---12
レポート ---------- 一年某君 ----13
居眠りノート ---------- 14
研究発表 ---------- 松山博 ---15
郷研のこと ---------- 桶口清司 ---17
孤独 ---------- 松山博 ---19
学生の文化活動 ------- 高島英明 ---20
のすたるじす ---------- 津坂孝隆 ---22
郷研すきゃんだる(1) ---------- 23

のすたるじす創刊に際して

片山勝治

中学生の時、学校の先生から「夢や希望は大きい程良い。いずれは小さくなって行くものだから」と聞いたことがありますが最・近はトくその言葉が思い出されます。我々「郷土研究会」が今年三月廃校寸前の中学校の宿直室で持った話し合いを通して第一歩を踏み出して以来今日に至るまでを振り返ってみると必ずしも初めの計画通りに進んで来なかったことと思わざるを得ません。入会希望を表示した新入生も最初の頃は十四、五名いましたが現在はっきりしたかたちで残っているのは五本の指で数えられるくらいだというのも活動の充実度を示す一つのバロメーターと思ってよいと思います。そこには私自身が日常の雑事や感情を性格に絡れたり人間としての価値観が変化したりして会長としての責任を果して来なかったことが一つの原因をなしていると思い反省しているこの次第です。しかし共同活動とは良くしたもので二年生諸君もクラブの中核となるべく成長し少数ながら意欲的な一年生諸君が出て来たことは非常に喜ばしいことだと思います。活動面では四月の稲荷間シリーズより続いて名太祭の時の合宿、夏休みの島鶴牛仙遺跡査、そして今次の「名古屋城」をテーマとする毎週の学習会とやって来ました。と兎かくも休まずにやっていかれるが人的にも活動面でも一つの流れがつくられてきたということです。これからその流れが絶えることなく又同一円周上を回っていくのではなくしてどんなにゆるいカーブでも一つのらせん形を描いて上昇して行くとしたら我々はそこに何等かの可能性が見出せるに違いありません。「一体俺はどうしてこんなことをしているのだろうか」「よそのクラブが羽振り良くやっているのに俺達はどうしてこんなに目立たぬことをせねばならないのかな」というようなことは私自身今まで何度も考えて来たし現在でも時々疑問に思うことがありますが、しかし新入生の多数が関心を示して

大都会のある大学祭のテーマにまで取り上げられる「郷土…」には何かあるはずです。目まぐるしく変化する現代に於て絶えず「無」に対する不安に苦しむ人間の心の底には Ein geborgenes 故郷喪失感が潜んでいるとある著名な哲学者がいった。ことがあります。私はこの意味をはっきり理解することが出来ませんが 万事流転 川底し何者も定住しない世界 にあって有限な期間だけ生きる我々が「その世界と少しでもそこに生きる人間をどんなに狭い範囲でも追求して行くのはたのもしいことだと思います。我々はサークルに於てそれらを厳しく追求して行く「流れ」を創造することなかで限りない可能性と収穫を見出そうではありませんか。その意味でどんなに粗少でもここに機関誌がすたらしく創刊号が発行され会員相互の内面的なつながりや向上を図る一つの場が設けられることは有意義なことだと思います。次号以後の充実を期しましょう

— 終り —

誌名由来

先月十人程のミーティングで機関誌の名称を決定すべく討論が行われその時候補として

1. 研鑽
2. 散楽
3. 青年
4. 知己
5. ノスタルジス

の五つが出され全員の後式投票で津坂君の出した「ノスタルジス」と決定されました。その議論は後に出ていますが、その後帰りの者(三)の怠惰や原稿の少なさから第一号発行が非常に遅れ申し訳ない次第です。次号からは皆さん何でもよいですからどしどし寄稿して下さいネ！

多様な会員の積極的参加がカギ！

―平山教養部教授クラブを語る―

まがりなりにも郷土研究会の名を掲げて発足したわがクラブは何と言っても会員自体が未熟なものであるから始めて飛び上ったカモメ みたいなもので何時落っこちるとも限らない。そこで何らかの指針を求めて見識豊かな平山教授に一筆願うことにした。多忙中何度も無理を申し上げてのことであるから我々もバイトに勉強に(?)忙しいのに甘えることなく真摯な態度であらゆるものを吸収しわがサークルの強力な発展に尽力しようではないか。以下は教授の草稿である。

思いつくままに

(その一)自己表現による向上

今度諸君が機関誌を持つことになったそうであるが、大変結構なことと思う。それは諸君のサークル又はクラブのメンバーの共通の広場としてメンバー相互間のより円滑なコミュニケーションの最上の道具として極めて有意義であることはあらためて指摘するまでもないだろうから。ここでは雑誌をもつことの別の効用について触れてみよう。

雑誌を持ったからには、メンバー各自が

ひとりのこゝろ書くことが何よりも大切なことである。雑誌を持つことの意義は書くことを通して始めて表出するものである。

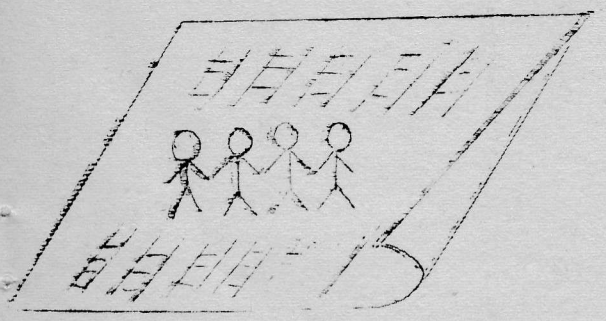
書くことは自己を表現することであるが、この表現ということは自己を確かめ或は自己を追求することに於ける大切である。

表現は自己をひとつの形として現わし、自己をその客観として眺めうる唯一の方法である。従って表現する者は自分が体験的内容として意識的であるが、しかし

ある場合には混沌として、ある場合には混沌としたまま感ずるだけ又は考えるだけしかない

ここに一つの形を創造せねばならない、つまり明確化せねばならないわけである。

書かゝ書くことによって、表現を通して、

自己の内面をあらわにし自己を眺め自己を確かめ、そのことによって深く自己を追求しそして豊かにすることが出来る。新聞雑誌を持つたからには、諸君は深くこの点に思いをとめて、みなが残らず書くように努めることである。そうすることによって、メンバー相互間のより内的コミュニケーションが可能になるだけでなく自己自身の成長が保証される

という二重の効用がはたされてくるのである。